The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	〈書評〉子島進著『ムスリムNGO——信仰と社会奉仕活動』
Author(s)	高尾, 賢一郎
Citation	宗教と社会貢献. 2014, 4(2), p. 27-30
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50284
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評

子島進著
『ムスリム NGO――信仰と社会奉仕活動』
山川出版社、2014 年 3 月 25 日、A5 判、116 頁、1,200 円（税別）

高尾賢一郎*

1. はじめに

著書は「NIHU（人間文化研究機構）プログラム・イスラーム地域研究」における、一般向けの入門書シリーズ「イスラームを知る」の 1 冊として刊行されたものである。「そで」には、「現代の私たちは、グローバル化したイスラームの宗教や文明に向き合い、これをさらに深く理解する必要に迫られている」と、それにあたり同シリーズが「異文化理解へ向けて信頼ある案内役を果たしてくれるものと信じている」という刊行趣旨が記載されている。また著者である子島進氏は、南アジアの文化人類学を専門とし、同地域のムスリム社会を事例として開発学にも携わる。同書によれば、著者は 1980 年代にパキスタン北部山岳地帯を訪れ、コミュニティ開発や医療・教育の制度が機能している所以をイスラーム系 NGO の活動を通して探ろうと当該研究に携わった。以上に基づき、同書の趣旨は、「ムスリム NGO」（イスラームの信仰に根ざしつつ、緊急救援や教育、福祉といった分野で社会奉仕に努める団体）の活動を通して、開発学から見たその特徴、またイスラームが様々な社会奉仕活動を促進させる背景を検討することにある。

2. 著書の構成と内容

著書の構成は次のとおりである。

NGO をとおしてイスラームを知る（※まえがき）
第一章　東日本大震災
第二章　草の根のムスリム NGO
第三章　ハムダルド財団
第四章　イスラームと NGO の関係
第五章　コミュニティ開発

* 上智大学アジア文化研究所・共同研究所員・takaokncr@gmail.com

おわりに
参考文献・図版出典一覧

第一章は、東日本大震災の際にパキスタン人を中心としたムスリム団体 Japan Islamic Trust（JIT）が行った救援活動を説明する。ここでは、東北以外の在日ムスリム団体が物資の調達と移送に携わったこと、海外のムスリムから JIT 経由で寄付金が集まったことを受け、JIT が国内外のムスリムのネットワークを活用したことがその活動の特徴として挙げられる。また従来 JIT がモスクを社会活動のハブとして周辺住民との交流を図り、コミュニティにとけ込む努力をしてきたことが、上記の活動に活かされたことを指摘する。

第二章は、JIT の源流を探るためパキスタンの新興 NGO の事例を紹介する。ここでは、礼拝所であるモスクの無償教育提供の場としての活用、また親族のネットワークの活用を通して JIT をはじめとした NGO が設立された背景や運営に係るエピソードが、インタビュー等から述べられる。

第三章は、引き続きパキスタンを舞台に古参の NGO ハムダルド財団の事例を取り上げる。ここでは、パキスタン独立（1947)、ソ連のアフガニスタン侵攻（1979-）に伴う難民の受け入れ、西側諸国によるパキスタンへの経済援助の受け皿として NGO が活躍したこと等が同財団の設立背景に関わったことが指摘される。そしてその活動として、イスラーム法学で規定された寄進財制度（ワクフ）の活用から、欧米諸国への海外留学の支援まで、宗教伝統を維持しつつその活動範囲が展開される様子が述べられる。

第四章は、これまでの事例を踏まえつつ、イスラームの教義や価値観が今日的な NGO といかに積極的に交わるかを検討し、イスラームと NGO との関連に係る議論枠組みを提示する。まず指摘されるのは喜捨（ザカート）の教義的重要性であり、寄付やボランティアを促す資源がイスラームにあることが説明される。またムスリム NGO の共通背景として非政府性、非営利性、自発性、持続性・形式性、他益性、慈善性が挙げられ、その中でも特に慈善型の NGO の多さが指摘される。加えて、政治的スローガンを掲げる「統合型」ではなく、特定の社会活動分野に携わる「個別領域型」が多いことがムスリム NGO の特徴として指摘される。そして NGO の動向と現在のイスラーム潮流との関係について、個人レベルの「イスラーム覚醒」から社会運動化した「イスラーム復興」に展開したことで、慈善協会

の設立や低所得者向けの医療活動等が活発化したことが述べられる。

第五章は、ムスリムNGOがいかにしてコミュニティ開発に関わるかを検討する。著者は冒頭、目前の切迫したニーズへの対応（第一世代）、自立に向けたコミュニティ開発（第二世代）、政策や制度改革を通じた持続可能なシステム開発（第三世代）、民衆を動かすヴィジョンの提示（第四世代）というNGOの発展段階を指摘するデビッド・コーテン（David Korten）のNGO世代論を引き合いに出す。そしてこれまでの事例のほとんどが第一世代型に該当することを受け、第二〜四世代に該当するコミュニティ開発に携わる事例を紹介する。取り上げられるのは、パキスタン北部山岳地帯で政府に代わって農村開発を指導したアーガー・ハーン、同国最大の都市カラチで都市スラムの水道・道路インフラの整備に地方からの流入民を巻き込んで取り組んだオーランギー・パイロット・プロジェクトである。その他、モスクの空きスペースでワンルーム学校を運営し、モスクを拠点にその活動を教育からコミュニティ開発へ展開した事例として、ラホールのカーウィシュ福祉財団が取り上げられる。

最後に「おわりで」で著者は、「先進国」日本のNGOが「発展途上国」を支援するという一方通行から、相互支援へのステージへと向かうことを想定し、それがムスリムNGOへの理解を含めた異文化理解の必要性を伴うことを述べる。以上のように、著書の流れとしては事例を取り上げる第一〜三章、イスラームとNGOの議論枠組みを検討する第四章、そしてNGOの発展動向を追う第五章という三部に分けることができよう。

3. 著書の論点と意義

趣旨に戻れば、著書は「ムスリムNGOはどのような特徴を持つか」、「イスラームの教義や価値観がどのようにNGOの活動を促すか」という二つの論点に対し、以上の内容を通してその答えを提示するものである。前者に関しては、非政府性、非営利性、自発性、持続性・形式性、他益性、慈善性という共通背景、慈善型NGOが多いこと、モスクを活動拠点とすること、特定の社会活動分野に携わる「個別領域型」が多いこと等が示された。また後者に関しては、ザカートの教義やワクフの制度、また人間の平等という教えや「アッラーの道のために努力する」というジハードの教えがムス

リムを慈善活動に促すことが示された。加えてパキスタンという舞台に関して、同書はソ連のアフガン侵攻を契機としたNGOの発展や、治安状況の悪化から家族・親族のネットワークへの依存がより強まるといった、地域的な特徴を示した。

以上の点を踏まえ、さらに同書の意義を、本誌（『宗教と社会貢献』）の読者の関心を想定しながら述べたい。まず世界のムスリム社会でどのようなNGOがあるのか、またどのような社会貢献活動の形があるのかを確認したい読者に対して、同書はじゅうぶんな情報を提供している。事例はほぼ南アジアに限られるが、そもそもNGOを取りまとめる機関や統計資料がなく、さらに複数の事例を取り扱う日本語の研究が少ないというムスリム社会のNGO活動を巡る状況に鑑みれば、そのことが同書の価値を切り下げることは決してない。また宗教と社会貢献活動との関連から、社会貢献活動を促進するイスラーム的要素を確認したい読者に対して、同書はそれを広く整理している。特にザカートに関しては、どのような教えかということよりも、どのように実現されているかということに焦点を当て、その多様な考え方、集め方について説明される――評者個人は、イギリスに本部を置くNGOイスラミック・リリーフの「ザカート・カリキュレーター」（自身の預貯金や収入等を入力してザカートの額を算出するウェブ・サイト）に驚かされた。

もっとも、同書がまえがきで言及しているように、ともすると否定的なイメージが強い昨今の「イスラーム」を巡る状況を勘案すれば、読者にとって、以上の「ムスリムの社会貢献」が理想的な事例のみを選りすぐったものに映る可能性もあろう。その点について同書は、NGO活動を妨げるパキスタン社会の背景を指摘することで応えている。治安上の問題を通して人間不信が醸成され、それによって親族間のネットワークを通したNGO活動が活発化したという背景説明は、イスラームが社会貢献を促進する教義を備えているからといって必ずしも豊かな互恵社会が築かれるわけではないことを理解させてくれる。理想（教義）と現実（社会における実践）に少なからず差があることは、同書が東日本大震災に際しての活動事例を通して言及する、宗教団体による社会貢献活動が宣教としての性格を備えうることの機微とあわせて、他の地域、また他の宗教文化に携わる読者にとっても共感を呼ぶ点ではないだろうか。